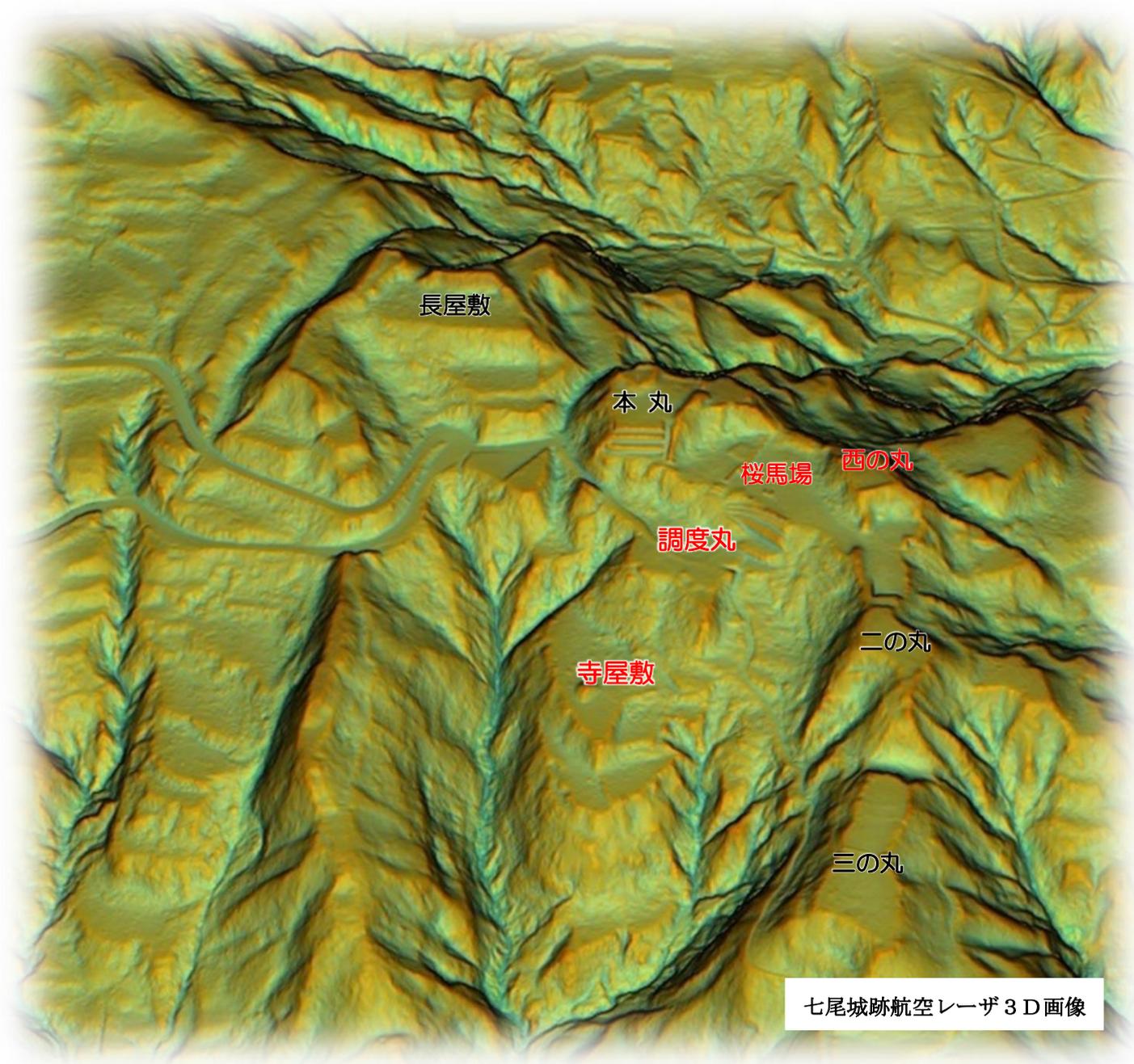


史跡七尾城跡保存活用計画策定フォーラム

# 七尾城跡航空レーザ測量図から探る七尾城の実像 実施報告書

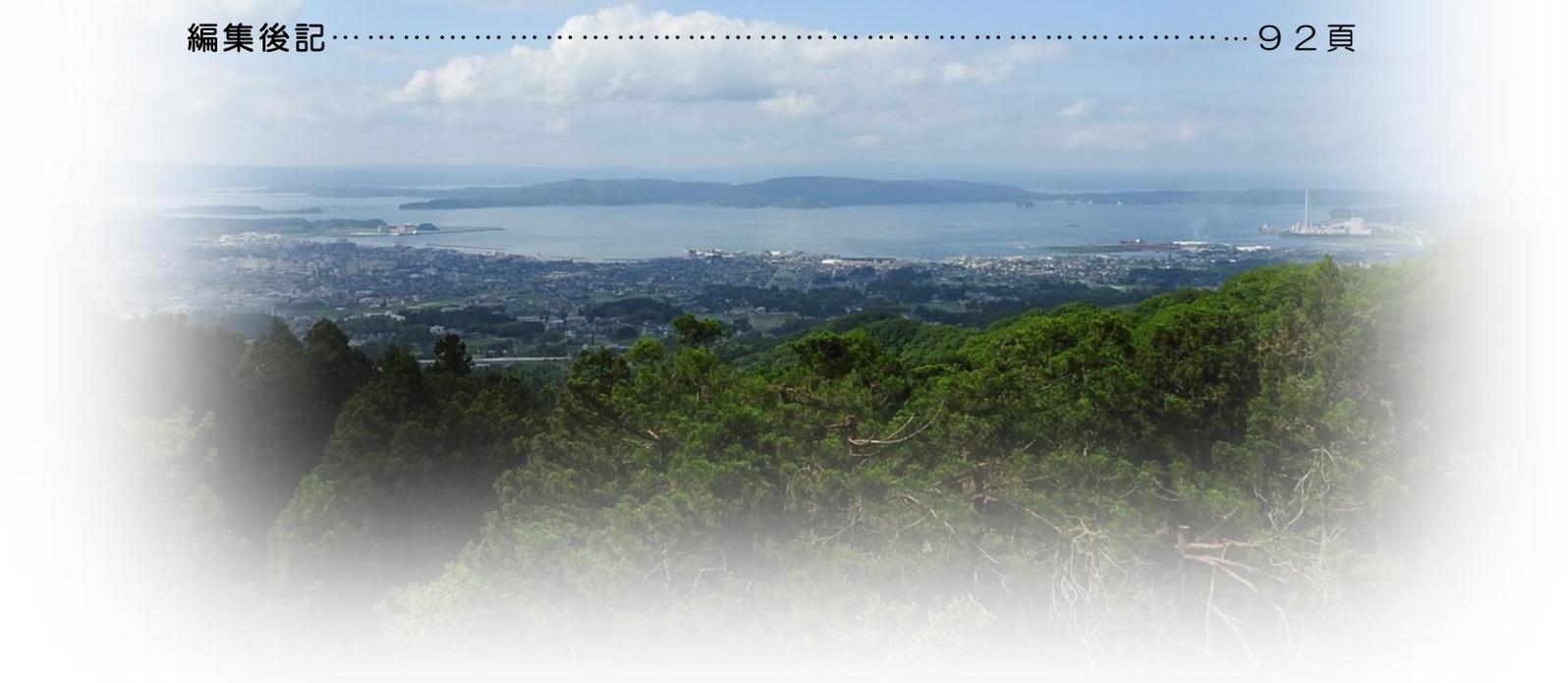


平成30年7月

七尾市教育委員会

# 目 次

発行にあたって	1 頁
講師・パネラー紹介	2 頁
1. フォーラム編	3 頁
(1) 講 演	
谷内尾 晋司「これまでの取り組みについて」	5 頁
千田 嘉博「レーザ測量図から見た七尾城跡の新評価」	13 頁
東四柳 史明「文献史料から見たレーザ測量図の成果」	24 頁
(2) フォーラム	
「七尾城の実像と今後の取り組みについて」	43 頁
谷内尾 晋司・東四柳 史明・千田 嘉博・国分 秀二	
2. 資料編	53 頁
(1) アンケート集計結果	55 頁
(2) 新聞記事等	62 頁
(3) 七尾城跡の本質的価値	72 頁
(4) 能登畠山氏・七尾城跡略年表	73 頁
(5) 七尾城跡に関する主な事業一覧表	74 頁
3. 付 編	75 頁
編集後記	92 頁



## 発行にあたって

七尾城跡は、能登畠山氏によって築かれた戦国時代の山城で、国内でも有数の規模と構造を持った城郭であり、昭和9年（1934）の国史跡に指定されています。

七尾市では、平成30年3月までに七尾城跡の保存・活用・整備を進めていく上で基本図となる航空レーザー測量図（S=1/500）を作成するとともに、その基本方針として「史跡七尾城跡保存活用計画」（以下、本計画）を策定しました。今後は本計画に基づきながら、七尾城跡の保存・活用・整備に関わる取り組みを着実に実施して参ります。

本書は、本計画策定前の市民説明会として、平成29年12月10日（日）に七尾中学校で行った公開フォーラム「七尾城跡航空レーザー測量図から探る七尾城の実像」の成果をまとめたものです。本計画の策定に携わっていただいた委員の方々から、これまでの七尾城跡の保存と活用に関する取り組みやレーザー測量図から得られたデータから明らかになったことなどを市民の皆様にご報告いただきました。また、フォーラムにご参加くださった皆様からは七尾城跡の保存と活用に関する多くのご意見・ご感想をいただきました。これらの成果を広く周知するとともに、皆様からいただいたご意見を今後の七尾城跡の保存・活用・整備の取り組みに活かしたく、本書を発行いたしました。

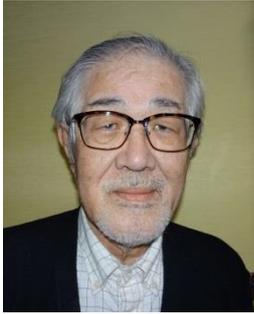
最後に、本書の発行にあたり関係者の方々からご指導・ご助言いただきました。ここにお礼を申し上げますとともに、今後とも七尾城跡の取り組みに、ご理解とご協力をいただきますようお願い申し上げます。

平成30年7月

七尾市教育委員会

教育長 高 絹 子

## 講師・パネラー紹介



やちお しんじ  
谷内尾 晋司（講師／コーディネーター）

石川考古学研究会 顧問（元会長）、考古学者

専門は日本考古学。石川県内の遺跡の発掘調査・市町村の文化財行政の指導に携わってきている。県内の遺跡保存や整備・活用事業の取りまとめ役として尽力している。

（史跡七尾城跡保存活用計画策定委員会 委員長）



ひがしよつやなぎ しみあき  
東四柳 史明（講師／パネラー）

金沢学院大学 名誉教授、歴史学者

専門は日本中世史。「北陸における守護・戦国大名」や「中世北陸の神社信仰」を研究テーマとする。歴史学における七尾城研究の第一人者である。2010年に「県内20以上の自治体史編纂に携わるなど郷土史の発展に寄与し、歴史資源を地域の活性化に生かす活動に力を注いだ」ことにより、北國文化賞を受賞。

（史跡七尾城跡保存活用計画策定委員会 副委員長）



せんだ よしひろ  
千田 嘉博（講師／パネラー）

奈良大学 教授（元学長）、城郭考古学者

専門は城郭考古学。日本各地の中世・近世城郭の発掘調査・整備に関わるほか、ヨーロッパ・モンゴル・ニュージーランドなど世界の城と日本の城の比較研究を行っている。城郭考古学における七尾城跡研究の第一人者である。2015年に「わが国における城郭の考古学的研究を新たに開拓しその確立と発展に寄与した」ことにより、濱田青陵賞を受賞。日本100名城選定委員、続日本100名城選定委員。

（史跡七尾城跡保存活用計画策定委員会 委員）



こくぶん しゅうじ  
国分 秀二（パネラー）

七尾城山を愛する会 会長

「城山（七尾城）の自然と歴史的環境の良好な保全と地域振興に寄与する」目的で1989年に設立した七尾城山を愛する会のけん引役として、毎日のように七尾城跡に登り、七尾城跡の保全に寄与している。能登半島国定公園七尾地区巡視員。

（史跡七尾城跡保存活用計画策定委員会 委員）

# フォーラム編

## 【 講 演 】

- ▣ 谷内尾 晋司「これまでの取り組みについて」
- ▣ 千田 嘉博「レーザ測量図から見た七尾城跡の新評価」
- ▣ 東四柳 史明「文献史料から見たレーザ測量図の成果」

## 【 フォーラム 】

「七尾城の実像と今後の取り組みについて」

谷内尾晋司・東四柳史明・千田嘉博・国分秀二



## これまでの取り組みについて

石川考古学研究会顧問 谷内尾 晋司

みなさん、こんにちは。委員長の谷内尾でございます。今日は、七尾中学校の立派な階段教室にまず驚いております。こういう会場で話すことができることは大変うれしく思っております。



今、ご紹介いただいたように、「七尾城跡保存活用計画」を、現在策定しております。七尾城は国指定史跡になっており、今まではいかに保存していくかということが大事でした。この保存活用計画というのは、それを保存するだけではなくて、地域の財産、宝として、いかに観光や教育・学習の場として活用していくか考え、そういった計画を策定していくということでございます。

現在、考古学とか文献（古文書など）を含めた歴史的な環境調査や、動植物や自然、地形、さらには自然災害やイノシシ等の被害等も含めた自然環境の調査、その他交通や周辺の観光施設、文化施設を含めた調査も合わせて行っています。また、今日の主なテーマとなります、航空レーザ測量を実施しまして、大きな成果をあげました。

この航空レーザ測量というのは、飛行機にレーザ・スキャナーを搭載しまして、一般の航空写真測量では撮影できないような部分、木の葉なんかを通して、下の地形の高さとかを測定することができる測量なので、かなり精度の高い測量図ができるというものです。後でご紹介いたしますけれども、今まで分からなかったような城の遺構等も分かって参りました。

それでは、これまでの取り組みについて説明、ご報告をいたします。

まず、この七尾城の城跡の指定というのは、昭和9年（1934）と大変古く、今から83年前です。現在、国の史跡指定の城跡というのは、194か所指定されております。その中で、戦前の指定というのは48か所。七尾城が昭和9年で、それ以前に指定されたお城というのは10か所しかございません。この戦前の指定というのは、大正8年（1919）に、今の文化財保護法に先立って「史跡天然記念物保存法」というのが制定されて、そこでの一番古い指定は、織田信長の安土城、それから豊臣秀吉が朝鮮出兵のときに築いた肥前の名護屋城で、これが大正年間に指定されています。その後、熊本城、名古屋城、姫路城というような非常にメジャーな城が続きます。名古屋城以前に指定された城の多くは現在、特別史跡に指定、いわゆる国宝になっております。そういう意味で七尾城というのは非常に古い指定であります。

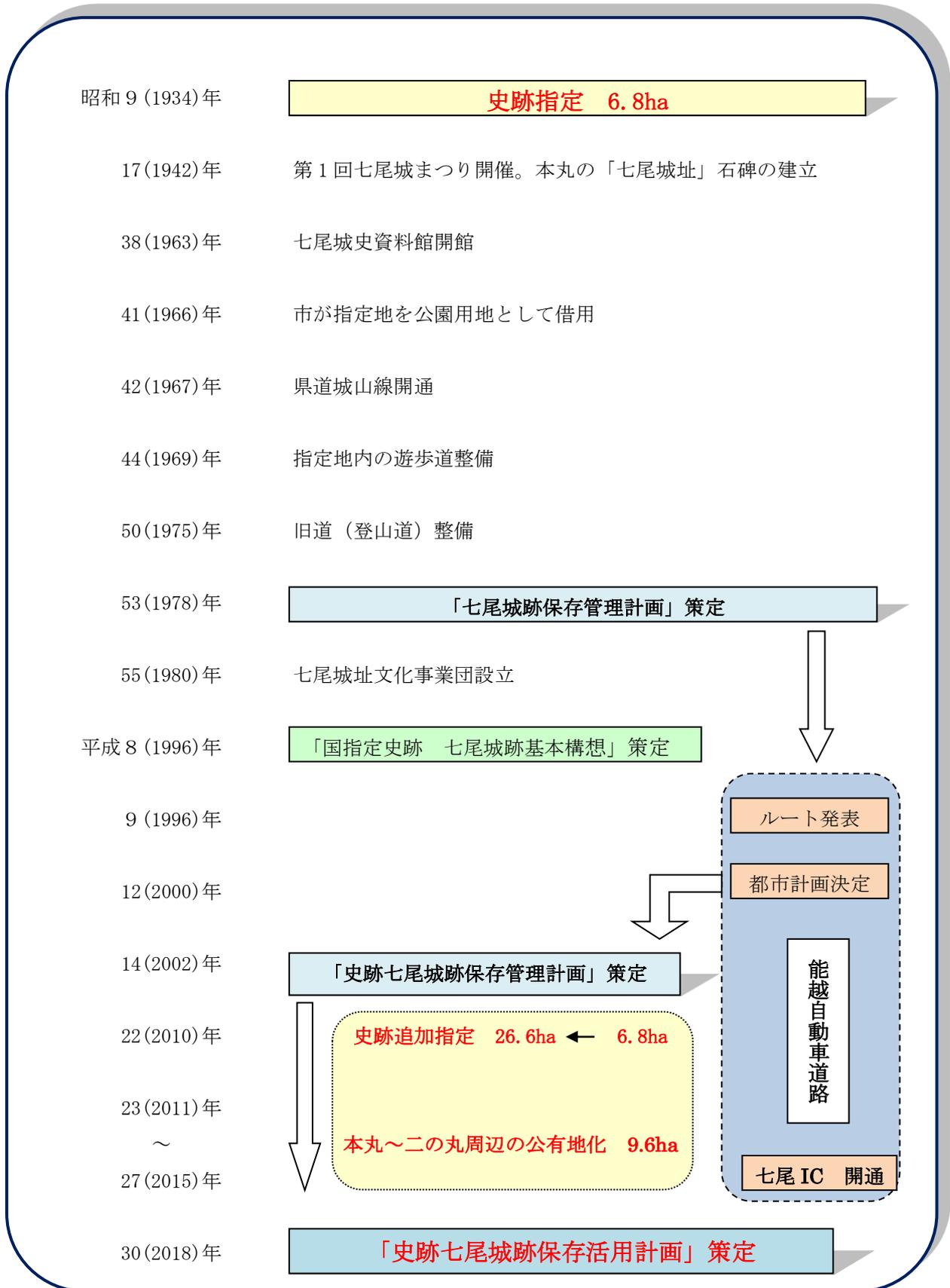
この七尾城が指定されたとき、同時に城が14か所指定されております。この14か所を見ると、昭和9年という、その時代の背景を反映しているのか、南北朝時代の南朝方の城がほとんどです。七尾城は南朝方の城ではないのにどうして指定されたのでしょうか。この時の指定理由を見ますと、能登畠山の居城であるということ、それからちょっと面白いのは、上杉謙信がその素晴らしい景色を漢詩に読んだことで有名な城であるということが指定の理由になっているのです。

今では少し考えられないような指定理由なのですが、この指定の調査をした文部省の役人は、自分も漢詩が好きだったようで、七尾城の



七尾城跡本丸からの景色

# 史跡七尾城跡保存活用計画策定までの沿革



史跡七尾城跡保存活用計画策定までの沿革（『史跡七尾城跡保存活用計画書』より引用）

測量をした時に謙信にならって歌を詠んでいます。測量のために城に登ったら非常に素晴らしい景色であった、いい城だ、自分も漢詩を詠んでいるということで、少し鼻負したということも考えられるわけでございます。

ちなみに上杉謙信の越後春日山城は、七尾城に遅れて昭和10年に国指定になっております。そうした意味で国指定としては、七尾城は全国でも非常に早い指定であったと言えます。

七尾城は城山のとっぺんだけが城であると、みなさん長いこと思ってきたと思います。実は、昭和47年（1972）に城山を流れる木落川の砂防ダムの工事があるって、この時に考えもしなかったような場所から石垣が発見されまして、戦国時代の焼物が出てきて、そこに曲輪があるということが分かりました。

そこで、七尾市教育委員会は、特に松浦五郎さんが中心となって、精力的に山の中を歩き回りました。松浦さんが城跡の踏査中に転んで大けがをしたとも聞いておりますが、大変熱心な方で、歩いて現在のような範囲にたくさんの曲輪、平坦面があることを確認されました。その後、それを写真測量で測量図を作りまして、それが今までの七尾城跡を考える基礎資料になって参りました。

このとき、その面積はだいたい木落川、大谷川、それに北側は農免道路までが七尾城の範囲であり、将来保護しなければならない、できれば国の指定にしたいということを報告書の中で語られております。そういうような話を地元でされたようなのですが、当時はまだ生活圏が含まれており、水田耕作等もありましたので、なかなか同意が得られなかったようです。そこで、早期の国指定というのは断念いたしまして、指定予定地として、将来にわたって保護していこうという基本方針がたてられました。

その後、七尾市がシッケ地区というところを発掘調査しまして、整然と

区画された城下町の遺構が非常に良好な状態で残っていることが明らかになりました（平成3年）。それを踏まえて七尾市は、平成5年（1993）に七尾城跡整備調査委員会を作りまして、平成8年には、国の指定に向けて、この城下町の遺構を史跡の範囲に含めた七尾城跡整備基本構想というものを作っております。

ところが、全体を国の指定にという雰囲気の中で突然、能越自動車道建設の問題が起こります。能越自動車道のルートが、この基本構想で「国の指定にしましょう」とした、そのど真ん中を通るということが発表されて、我々は非常に驚きました。

基本構想で「国の指定にしましょう」という雰囲気の中で、ど真ん中を横断するようなかたちで計画されたということで、これには文化庁も非常にびっくり



りしまして、「いったい石川県はどうなっているんだ。七尾市はどうなっているんだ」というような話がございました。慌てて当時の国土交通省と保存協議をしまして、なんとか指定予定地のところから路線を外していただけないかという話をしました。人家等がございまして路線設定が難しかったのですが、ぎりぎり北の方へふっていただき、現在の能越道の路線が決定します。なおかつ、あそこは大きく土盛りの予定だったのですが、土盛りではやっぱり遺跡が分断されてしまいます。それを橋げた等に変えて保存できないかということで、事前に県の埋蔵文化財センターが橋げたの位置を決めるための発掘調査を実施しております。

これによって、この城下町遺跡の遺構の状況というのはかなり明らかになって参りました。きちんとした大手道があり、城の外郭を防御する惣構

えの堀などの施設がきちんと残されている。それから、短冊形に区画された町屋の跡とか、鋳物なんかを作った鍛冶工房の跡とか、金細工をした金を溶かしたるつぼが出土したとか、この



あたりの残りが非常によく、重要な場所であることがあらためて確認されたわけです。そういった遺跡を残すような状態で橋げたを設定していただき、現在のような道路になったという経緯がございます。

こういうことがありまして、七尾市では平成14年（2002）にあらためて、七尾城跡を将来にどんなふうに残していくかということで、保存管理計画を策定しております。それにもとづいて、平成23年（2011）2月には、山城部分の追加指定がありました。山城の主要部約20ヘクタールが追加されまして、戦前の指定と合わせて約26・6ヘクタールが指定地になっております。

その後、平成23年から27年にかけて、土地の買収・土地の公有化事業を行いまして、本丸とか、二の丸とか、城の主要部分の公有化が進められております。また、合わせて、七尾城は古い石垣が残されているということで有名ですが、石垣の実態調査というのも5年間の計画で実施いたしました。この調査によって、ほぼ全域に防御のためとか、区画のためとか、土地造成のためと思われるような石垣が発見されました。これまで100か所ぐらいの石垣でしたが、この調査で全域約



400か所にかけて石垣が存在していることが分かりました。その石垣の時代については、おそらく畠山、それから上杉、織田、前田も一時入っておりますから、そういった時代を通じて築かれたものと思われそうですが、どの時代にはどうであったかというのは今後の課題となっております。

それから七尾城の活用の面についてです。七尾城が昭和9年に国の指定になった後、七尾城まつりが昭和17年（1942）から開催されております。今年（平成29年）で76回目ということで、戦時中も欠かさず祭りを行っており、これはすごいことだと思います。



七尾城まつりの様子

七尾城史資料館が、畠山（一清）さんの寄付等によって昭和38年（1963）に開館します。だいぶ老朽化しておりますけれども、見学者には小さいけれども評判が良いようでございます。



七尾城史資料館

その後、昭和55年（1980）に七尾城址文化事業団が設立され、七尾城に関するいろんな文化活動等を行い、機関紙「七つ尾」を発行しています。

平成元年（1989）には、七尾城を愛する会が設立して、七尾城の管理とかいろんなことをボランティア等でやっていただいているということでございます。

平成18年（2006）には日本城郭協会から日本100名城に七尾城が認定されました。この名城100城について、全国的なスタンプラリー

が行われているようで、ホームページを見ますと、100城登城を達成された方が1500名ほどおられるそうです。

その中で100城の感想がいろいろ載っているのですが、おむね七尾城は評判が良いよう



七尾城跡調度丸

です。良い悪いは別にして、本丸近くまで車で行けるということや、賛否両論あるのではないかと思うのですけれども、よく自然が残されている。それから、その杉こだちの中からぱっと垣間見るような、その野面積みの石垣が素晴らしい。他の城には見られない、なんともいえない雰囲気がある。そういった見方もあるのかとあらためて城跡の良さを感じました。

そうということで県外からの観光者・見学者が非常に増えています。七尾市がとったデータではだいたい年間2万人ぐらい、県外からの方がかなり多いということです。県内・市民の方も



ボランティアガイドの様子

多いのですが、県外からの方が多いということでございます。そうした中でボランティアガイド「はろうななお」も、見学者の印象では非常に説明等も良くて評判も良いようで、観光ツアーの場所としても定着しつつあるという感じもいたします。

活用に向けての今後の課題ですが、これは、この後のフォーラム等でまた皆様と一緒に考えていきたいと思っております。それでは、私からの報告は以上です。

# レーザー測量から見た七尾城跡の新評価

奈良大学教授 千田 嘉博

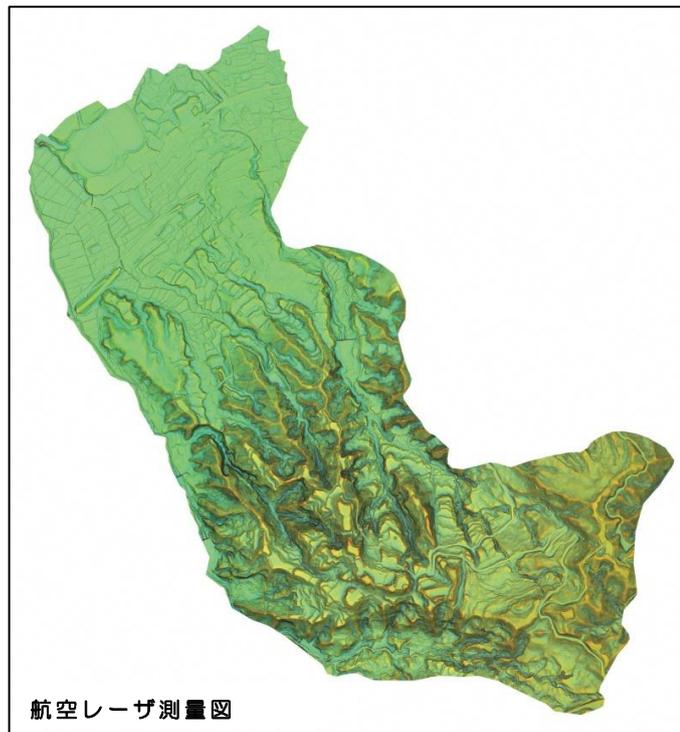
## 1. レーザ測量とは何か

ご紹介を賜りました千田です。どうぞよろしくお願いいたします。今日は七尾城跡の航空レーザー測量図から見た七尾城跡の新評価ということで、今回七尾市があらたに調査されましたレーザー測量の成果について考えて参りたいと思います。

この写真の上が、現在の七尾城からさらに上に登った展望台のところから撮った写真です。下がレーザー測量図の図面になります。今見ますと、当然木が生えていて、美しい緑の山になっているのが七尾



展望台から見た七尾城跡



航空レーザー測量図

城跡ということになります。これは、美しい里山の自然に触れるということでは本当に素晴らしい景色ですが、今から400年前の七尾城跡はどうだったのかということを考えようと思うと、心の目で茂った木を適宜消去して「立派な城だった」と思わないといけません。現地を実際に訪ねても、七尾城の本当のすごさを体感するには、それなりの努力が必要なのです。そこで以前、七尾市は、コンピュータ・グラフィックスを製作されて、当

時の姿をバーチャルで再現し、石垣をめぐらし城内に建物が建ち並んだ戦国末期一近世初頭の七尾城を見ていただけるようになりました。

そして今回、七尾市は航空レーザー測量を広大な城域のすべてにわたって実施され、詳細な地形・遺構情報を把握する詳細図面を作られました。空の上からレーザー光を発射して、地表にあたって返ってきたレーザーのデータだけを用いて、実際には木が生えているけれども、データ上では木が全く生えていない地表の凹凸だけを把握して、地形と城跡の遺構を表現した最新の測量方法です。従来、深い木々に覆われた山城のような遺跡を詳細につかむことはとても難しかったのですが、レーザー測量によつて的確に城の全貌をつかめるようになりました。たいへん大きな成果です。

レーザー測量によって得られた3次元の位置情報をもつデータは、そのままでは点群データですので、それを画面上で俯瞰しても点と点との間が透けてしまって、微細な地形を的確に理解できません。そこで今回のシンポジウムに合わせて点群データを解析し、最寄りの点と点とを結んで仮想的な三角の面（Tin）をコンピュータ上に構成し、点群データを三角面の構成体で描き出す3次元地形データに変換しました。さらにそれをわかりやすくご覧いただくために、動画形式にしました。

## 2. 七尾城下を読み直す

それでは七尾城の山麓、城下部分の測量成果からご覧いただきたいと思います。すごいでしょ。細かな地形はもちろん、城や城下の遺構を立体的に見られます。日影、つまりコンピュータ上の太陽の位置を任意に設定できますので、影を出させて必要な地形・遺構情報をくっきりと浮かび上がらせられます。そして、先にご説明したとおり、現地には木が生えていて、家があつたりしますけども、そういうデータをなくして、すべて地形情報

だけを抽出して観察・分析できています。本日この会場で、世界ではじめて見ていただいている七尾城のレーザ測量の成果は、そういう映像です。たとえば尾根の上には砦跡がくっきり見えています。また城下を守った都市囲郭「惣構え」もこんなきれいに見えています。これは館跡ですね。それからここにも砦跡がありますね。

つまり七尾城というと、山の上が城というイメージがあると思いますが、実は山麓までひとつづきですごい遺構群があって、七尾城が続いていたことが、はっきり見えてきたのです。こちらに木落川が流れていて、あちらは大谷川です。その間に惣構え（人工の堀と土塁）があって、その内側の城下の「内町」に相当したところと、惣構えの外の「外町」に相当したところがあって、惣構えを脇からにらんで守りの要になる一番張り出した尾根のところに小池川原の

砦があったのが読みとれます。地形を巧みに活かし、守りに配慮した戦国城下町跡が、山の上の城とセットで、こんなにきれいに残っているのです。



レーザ測量から城下の構造も一步踏み込んで分析できました。これまでも城下に武家屋敷や町屋が建ち並び、また発掘調査からたくさんの職人が働いていたことは指摘されてきました。改めてそうした城下の遺構を3次元の地形データから解析すると、城下の町は、均一に広がっていたのではなく、3つの大型の館を核に、館に至る計画的な道路に沿って展開した「まとまった単位」を構成したと捉え直せるのです。

たとえば、畠山氏の山麓の館には、それに向かう計画的な直線道路があって、館の前面に大規模な屋敷群が展開しました。そして隣の尾根筋の奥の高い位置に目立つ大型の館があって、そこに向かって



やはり計画的な直線道路が伸びていました。その道路沿いに屋敷群や町家が展開していました。また、途中谷を挟んださらに東の尾根の上にも大型の館があって、それを核に武家屋敷のまとまりがあったと読みとれます。このように3つの大型の館が城下を編成する核になっていて、その複合体として七尾城下町ができていて、それらを包括的に惣構えが囲い込んでひとつの都市を形成したと再評価できるのです。七尾城下の構造をどう理解するかという根本に関わるのが、レーザ測量図で見えてきました。

### 3.山腹の遺構群

山麓の城下は要所の砦や惣構え、高所に占地した大型の館群によって複合的に守っていたようすを見てきました。

しかしレーザ測量の成果を山腹についても見ていくと、実はそれだけではなかったことに気がつきました。これはほぼ真上から見た図面でありま  
す。ご覧いただくと、先ほど紹介した砦が要所ごとにあただけではなく、この尾根筋に尾根を人工的に断ち切った堀切りを要所ごとに設けていて、山の地形そのものが守りに都合の良い地形でしたが、さらに人工の堀を掘ったことで、徹底した守りを施していたようすが見えたのです。

従来知られていた砦だけが点として山腹を守っていたのではなく、実は

この山全体を守りの仕組みに取り込んでいたのです。つまり山の上に城があって、麓に城下があってというふうに、両者が分離していたのではなく、まさに山上-山下がひとつの都市・城下町として連携機



能していたという、たいへんなことが分かってきたのです。

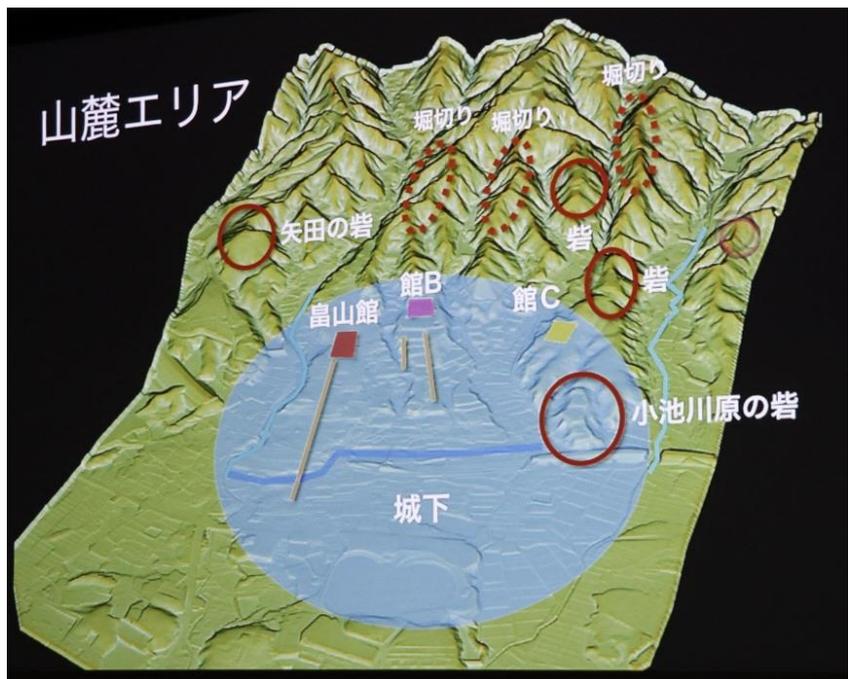
さらに、もう一つの尾根筋の伸びているところにも矢田の砦がありまして、これをアップで見えていただきますと、尾根の先端のところに土塁をつくって、平場を作って、守りを固めていたという、そういうようすが鮮やかに見えます。城下町の側面に山腹の砦を配置して、強固に守った当時の姿が浮かび上がってきました。これまでは七尾城はたいへん高い山の上に城の主要部があったので、山麓と山上は分離していたと捉えられてきました。しかしレーザ測量によって草木に覆われ複雑に伸びた山腹の尾根筋に、適宜、堀切りや砦を設けて山麓から山上まで途切れない防御を実現していたと再評価しなくてはなりません。七尾城は規模とともに戦国期城下町としての特質と完成度の高さにおいても、全国屈指の史跡といわなくてはなりません。

改めて山麓から中腹にかけてわかったことをまとめます。(1)城下は大規模に広がっていて、その途中に内町と外町を分けた惣構え（堀と土塁の防御線）があって、惣構えと連携した砦群を配置していた。

(2)城下域の一番奥の高所には大型の館が3つあって、その大型の館を核にまとまりのある3つの町の単位をつくっていた。

(3)山腹の尾根筋には地形を選んで堀切りを設けて山城への交通を掌握

し、山麓から山腹、そして山上へとひとつづきの防御システムを実現していた。本当にすごいと思いますし、よくこれだけの遺構群が残っていたと思います。地域の方が



七尾城を大切にしてくられたからだ、感謝したいと思います。

#### 4. 山上の中心部

つぎに中心部の山城を見ていきたいと思います。本丸がここ、長屋敷がここ、桜馬場、二の丸、三の丸はそれぞれここです。曲輪の姿をこれほど鮮明に分析できるとは、とても幸せです。山城調査では、藪や竹林を越えて虫やヘビ、イノシシにも注意して遺構を把握していきます。ところがレーザー測量による城跡調査が実現して、21世紀の城郭考古学者はコタツに入りながら城の研究ができるようになりそうです。

さて城の中心部に近づいていきましょう。地形を活かしてたくさんの防御した削平段、曲輪を見事につくっています。主要な尾根筋だけでなく派生した尾根筋にも曲輪が並んだのが見えます。まさに巨大な城でした。

ほぼ真上から七尾城を俯瞰します。当時の七尾城の中心部は、敵を早く発見し、弓矢・鉄砲を効果的に使うために周辺の植生を管理し、木々を伐っていたと思われます。今この三次元のレーザー測量でご覧いただいているこの七尾城の姿は、まさに400年前の七尾城の中心部はこんなふうに見

えていた、あるいはさらに徹底して木を伐った姿ということになります。

本丸や桜馬場、二の丸、三の丸、長屋敷など訪ねる方が多いところがよくわかります。さらに、ふつうは行かない派生尾根の先の、藪に覆われている遺構群も鮮やかに見えています。曲輪に



沿って土塁が見事に伸びて、守りを固めていたのをつかめます。その尾根からさらに派生した尾根にも、堀切りを要所に設けて、尾根筋を進んでくる敵を阻止していました。いずれも自然地形を巧みに使っていましたが、地形の険しさに頼っただけでなく、そこに人工の堀や土塁を設けて守りを固めていたのです。まさに戦国時代の城づくりの知恵を結集し、壮大な規模の防御した屋敷地を山中に生み出した、ものすごい城塞都市でした。

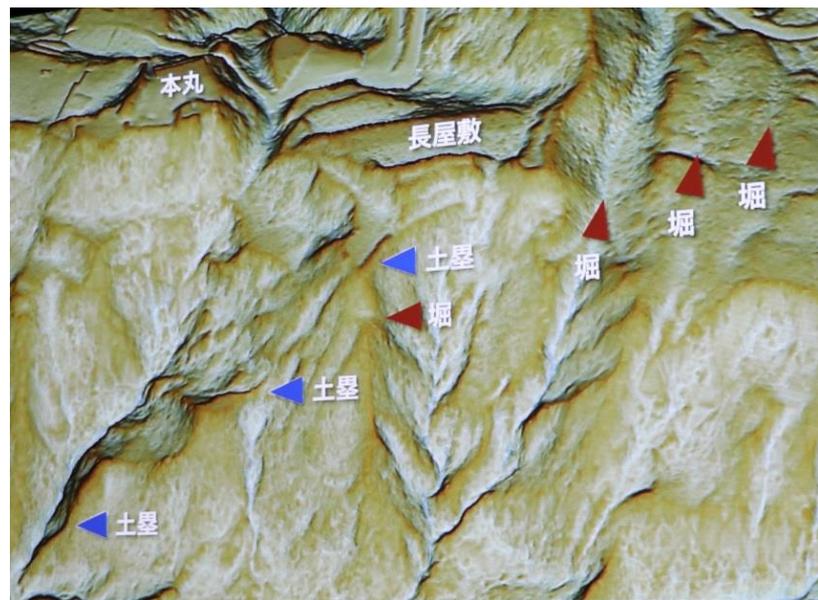
細かな遺構の読み解きは随所に行えますが、レーザ測量の成果から、長屋敷を事例に具体的な分析をしてみましょう。映像で、斜めに白く伸びて見えるのは、道の痕跡です。その道が登っていった先は茶色く表現した土塁が途切れていて、門があったところ、出入り口跡と判断できます。曲輪や土塁がわかるだけでなく、ここの曲輪を接続した当時の城内道も把握できるのです。

さらに詳細に長屋敷に接続した城内道を分析してみると、道の途中の斜面を人工的に掘り窪めた豎堀をつくって道を豎堀で遮断したようが見えます。道を堀で分断してしまえば、人が通れなくなってしまいます。

それでは一見矛盾するこの道と豎堀の遺構どう考えるか。私は、この豎堀を掘ったところに橋を架けて、日常的には通行できるようにしていたと復元すべきだと考えます。つまりレーザ測量で残っている遺構を詳細に把握できるだけでなく、失われた遺構についても的確に復元することができるのです。将来はこの歴史的な城内道を整備して、橋も復元して、当時の道筋を歩いて七尾城を見学できるようにしたらと思います。

長屋敷の最高所にあった曲輪は、城外側の斜面にそって長く土塁線が伸びていました。その土塁の内側には通路あるいは塹壕状の施設を組み合わせて、守っていました。長屋敷はこうした施設で自身を守っただけでなく、長屋敷が本丸の側面を守った役割も果たしていたので、念入りな防御施設を整えたのでしょう。

長屋敷の外側の尾根筋を断ち切った巨大な堀切りの存在は、これまでもよく知られていました。しかしレーザ測量を分析すると、尾根筋を断ち切



った大堀切の前後に連携した堀の痕跡を見つけられます。実は三重の堀を設け、尾根筋からの侵入を防いだ念入りな工事をしていました。

長屋敷には今見てきた部分を中心に、山麓に向かって伸びた尾根筋に多くの削平段を備えました。これらは屋敷地と考えられ、長屋敷を頂点にしたひとまとまりの曲輪群を構成していました。つまり本丸を越えるような規模で、長屋敷を中心とした屋敷群が城内に展開していたとわかるのです。この姿が天正期の長屋敷を伝えているとすれば、きわめて大きな力を長氏

がもっていたのを遺構が物語るのです。最終段階の畠山氏の政治と権力を、城の構造から読みとれるのです。

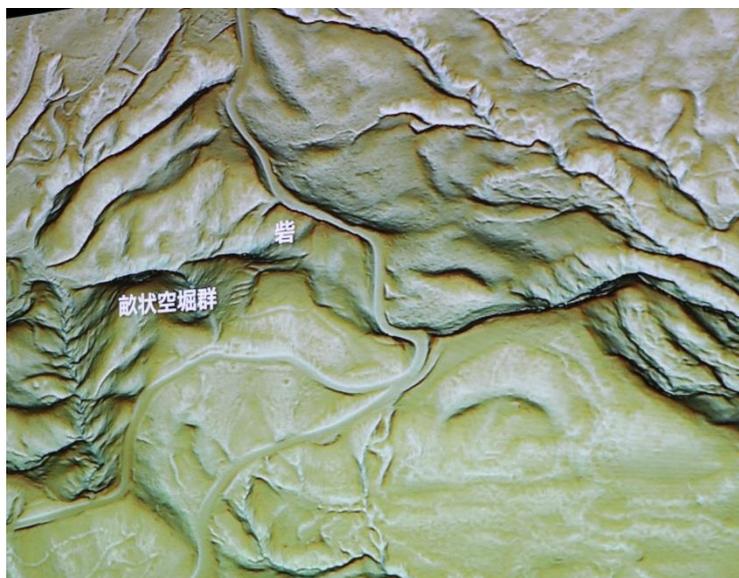
長屋敷を頂点に段々に築いた屋敷群は、レーザ測量からわかるように、屋敷群を貫いた中央に、計画性の高い直線道路を通していました。自然地形に影響されましたが、計画的に山中の屋敷群をつくっていたのです。このような細かな読み解きは従来の測量図ではできませんでした。レーザ測量の成果を通じて城がどのように設計されていたのかを考えられるようになったのも、大きな前進といえます。

## 5. 中心部東の砦

七尾城は周辺部に点々と砦を備えていました。山麓の砦については先に概観しましたが、山上の中心部の東にも砦がありました。多くの砦を七尾城全体の中にどう位置づけるかは、必ずしも明らかではありませんでした。

中心部東の砦は、畝状空堀群と呼ぶ縦堀と縦土塁を並べ築いた防御施設を備えていました。この遺構は草木に埋もれていますが、レーザ測量で鮮やかにつかめます。そして単独の砦のようにこれまで理解してきましたが、この離れた尾根まで堀などの遺構を途切れずに設けていて、城が続いていたのです。

七尾城はこれまでのイメージよりも広い範囲に及び、地形を利用した防御ラインを設定し、要所に見張りとし守りの拠点になった砦を設けていたようすが、鮮明になりました。



中心部東の砦は、曲輪そのものは比較的単純なかたちをしていました。しかし石動山の方に向けた斜面には、先に申しましたように、豎堀と土塁を並べ築いた畝状空堀群を設置していました。畝状空堀群は戦国時代に全国的に出現しました。さて七尾城の砦に畝状空堀群を設けたのは誰だったのでしょうか。畠山氏の段階から砦があって、戦国末期に畝状空堀群を付加したと考えるべきか、それとも主要な城域から外れたところだったので、上杉謙信の七尾城攻めするとき、あるいは上杉氏の七尾城領有時代に改修して付加したのか、夢が膨らみます。こうした謎は今後、発掘調査を計画的に進めることで、解明できると思います。七尾市教育委員会の調査に期待しています。

## まとめ

本日お話ししてきたことをまとめます。今回のレーザー測量の図面ができたことで、広大な七尾城の遺構を均一な精度で把握できるようになりました。従来は、地表面観察による「縄張り調査」で極力、遺構の把握に努めてきました。しかし個々の遺構の評価は調査者の判断によっていて、客観的な評価に努めても、完全に主観は排除できませんでした。レーザー測量は地形にせよ遺構にせよ均一に把握して客観的に表現していますので、より正確で科学的に七尾城を理解できるようになりました。これほど大規模な山城と城下までを、先進的なレーザー測量で把握したのは画期的です。七尾市の取り組みは、たいへん高く評価されます。

そして、レーザー測量によって、七尾城が山城から城下まで、すべてがきわめて良好に残る戦国期拠点城郭であることが、一層明確になりました。これは全国的に見ても七尾城だけといってよいと思います。すでに七尾城は国の史跡ですが、規模や歴史的重要性からいうと、遺跡の国宝である国

の特別史跡に匹敵すると思います。

今日は七尾でその成果についてのお話をさせていただく機会を与えていただきました。今日の三次元のレーザ測量の動画を、世界でご覧になったのは、本日お出で下さったみなさんだけです。自慢してよいと思います。そして、ぜひ日本中の城好きにも七尾城の魅力を広めていきたいと思えます。

こんなにすごい城が七尾市にある。七尾城を訪ねると、温泉にも入れますし、おいしいお魚も食べられます。ぜひ七尾城のレーザ測量の成果を、東京や大阪、名古屋、福岡をはじめとした各地でお披露目をして、「みなさん七尾に来てください。七尾に来てこんなすごいお城を探険しましょう。

山に登って疲れたら温泉にも入りましょう」とアピールしたいと思えます。まずは市民のみなさまに、七尾城のすごさを全国に広めていただけたらと願っています。



## 文献史料から見たレーザー測量の成果

金沢学院大学名誉教授 東四柳 史明

先ほど、谷内尾さんの方から、これまでの七尾城の史跡としての整備、あるいは調査の流れをご説明いただきました。さらに千田先生から、レーザー測量図を通して、七尾城はこの七尾の山



全域にわたってたくさんの人工的な手が加わっている、つまり自然地形にかなりの手を加えた山城の跡だということが明らかになったというお話をいただいたわけであります。

実際、これまで七尾城はずいぶん研究されており、かなり城域は広いということは言われていたわけであります。今回の調査によって、その辺の全貌がだいたい掴みかけてきたということだろうと思います。

ただ遺構がたくさんあって、そして人工的にかなり手が加わっている。その遺構の一つ一つがどういう役割、どういう機能を果たしていたものなのかということになると、今後の調査を待たなければならない部分がかかなりあるのではなかろうか。

と言いますのも、七尾城というのは、これまでちゃんとした発掘調査がはなされてないわけでして、上から見てこうだと思っことはありますが、実際に掘ってみると、そこからどういうものが出てきて、その遺構がどの時代にどのような施設がそこにあったのかというようなことまでは、まだ十分に分かっていない面があります。その辺のところは、私たち七尾城に関心を持っている人間としては歯がゆい部分でありまして、今後、調査が進められることによって明らかになっていくことに期待したいと思

っています。そうなることによって、日本最大の規模を持つ七尾城というものの内容の構成、あるいはその城の持つ機能、性格というものが、いくつ明らかになるのではないかと思うわけであります。

ところで、私は大学生の時の卒業論文ではじめて七尾城畠山氏のことを勉強しまして、それ以来、50年ばかり七尾城のこと、畠山氏のことにごだわり続けて今日に至っているわけであります。文献史料を通して七尾城のことについて勉強してきた人間として、今回私に課せられましたのは、レーザ測量から得られたデータ等を文献史料の側から見て、肉付け、説明することです。お配りしました2枚ばかりの資料をご覧いただきながら話をしていきたいと思ひます。

実は、七尾城のことに関して書かれた文献史料というのは、畠山氏関係の古文書であるとか、あるいは京都の公家の日記であるとかがありますが、いろいろ七尾城に関連した詳しい記事がないものかと探してみますと、意外と少ないのであります。その乏しい七尾城に関する文献史料を一つずつ取り上げながら読み解く試みをしてみたいというのが、今からの私の仕事ではなかろうかと思うわけですが。

さて、七尾城はいつぐらいから出来たのかという話ですが、少なくとも室町時代、応仁の乱（1467～77）が終わった直後、能登守護畠山義統は京都から能登に帰ってきます。その時に住むことになった義統の住居はどこかと言いますと、当時の住所でいうと「能登国鹿島郡八田郷府中」と書いてある。ですから、八田郷内の府中、おそらく現在の七尾の市街地だろうと思ひます。そこにかつて守護所と呼ばれる、今でいう県庁のような、国の政治支配を行う施設、そして守護の屋敷が以前から置かれていたと思ひます。ただし、守護は応仁の乱以前は在京、京都に平生居るというのが原則でありまして、国許には守護代の遊佐氏が国許の守護支配の実務

の責任者として、八田郷府中の守護所を守っていたと思います。そこへ、応仁の乱が終わった後、京都に居づらくなった畠山義統が能登へ帰ってきて、そこに住むようになった。ですから、少なくとも15世紀の終わりくらい、応仁の乱以降、戦国時代の初期の段階では、畠山氏は現在の七尾の市街地のあたりに屋敷を構えて住んでいたであろう。そのころに京都から能登にやってきた招月庵正広という歌人が、畠山氏の府中の守護館で歌会を開いたときの和歌をみると、その屋敷の座敷の向こうに庭があって、その庭の向こうに海が見え、島が見えると、つまり、能登島がその屋敷の庭園の借景になっていたと書かれています。もしその和歌が守護の居館付近の風景を忠実に詠んでいたものだとすれば、能登島を借景に見るような、比較的海に近い場所に守護の居館があったのではないかと推測できるわけです。ともかくも、現在の七尾の市街地の一角に当初室町時代には守護の畠山の屋敷があったと思われます。

ところが、戦国時代になりまして、やがて畠山氏は府中の館から七尾城を築いて現在の城山の場所の方へ移っていったと思います。実は、七尾という地名がいつから史料にみえてくるかといいますと、史料(1)のところにありますように、戦国前期の永正11年(1514)頃に能登で内乱が起こりまして、このときに当時の守護畠山義元の奉行人であった隠岐統朝と三宅俊長が、鹿島郡大呑北荘の百姓に対して、畠山氏の要請にこたえて武器を持って七尾に出向き、畠山方として頑張ったことに対し、その忠節は神妙であるとして、年貢の10分の1を今後永久に免除してやるということ

史料(1) 加越能古文叢

就今度七尾江御出張、忠節神妙之条、御年貢之拾分一永代御免也、弥向後粉骨肝要之由、依仰執達如件、

永正十一  
十二月廿六日

大呑北庄御百姓中

統朝 (花押影)  
俊長 (花押影)

書いた古文書があります。ここに出てくる「七尾御出張」という言葉が、七尾という地名の初見です。ですから、七尾という地名は、今からちょうど500年ほど前に初めて確認できる地名です。おそらく、私はこの時期ぐらいに、大呑の百姓たちが戦仕立てをして「七尾」に出向いて行ったとありますから、現在の七尾城がその頃あって、その七尾城を指すのか、七尾城の山麓にあった城下町を指すのか、ということになると特定はできませんが、少なくとも「七尾」という場所に畠山方の戦いの陣が布かれていて、そこに大呑の百姓たちが出向いて行った。そして守護方として戦って、手柄を立てて年貢を免除してもらったということは明らかです。

この永正11年頃に能登で内乱が起こった時期に七尾城が築かれたのではなかろうかと推測できます。この七尾という地名は、七尾築城と関連して生まれ、使われるようになった地名ではなかろうかと思えます。江戸時代の七尾の人たちは、もともと「七つ尾」がその語源とし、「梅の尾」とか「松の尾」とかいう「尾」のつく地名の尾根が七つあって、その七つの尾根を総称して七尾山と呼んだというように理解しており、七尾山という地名は史料(4)の天文13年(1544)のところでも「七尾山」という言い方をしており、これは七尾山に中世の城郭が築かれたことで、七尾城が畠山氏の拠点になったのではないかと思います。おそらく史料(1)の永正年間あたりに築城されたのではなかろうかと考えられます。

ところで、史料(2)は、史料(1)の3年後の永正14年(1517)頃の史料で、京都から公家の冷泉為広という人が、

史料(2) 冷泉為広能州下向日記

同(永正十四年)  
 一、九月廿七日、後藤忠兵衛弟子トシテ、百首并太刀アリ、  
 則納也、  
 (永正十四年九月) 石動山へ参詣、五社マシマス、太刀進上ス、  
 一、同廿五日、宿房妙藏院ニ二百アリテ、同廿七日ニ七尾へ帰也、  
 妙藏院絹一疋并杉原ニスヘテクレラル、然ニ石動山ノ心ヲ  
 詠テ房主ニツカハス、  
 コレヤ此神ノ力ノ□□□キヤ四方ニ名高キ山風ノ声

これは歌の家元みたいな公家ですが、この人物が当時の能登守護の畠山義総の招きによって能登にやってきます。この冷泉為広は、永正14年9月25日に、石動山にお参りに登っていきまして、石動山の五社権現をお参りにしています。そして、石動山の妙蔵院という僧坊に2日ほど泊まって、27日に「七尾」へ帰ってきたとあります。この「七尾」は少なくとも当時七尾城のあった場所、あるいは七尾城の山麓（城下町）を含めた場所であったと思います。なぜかという、冷泉為広は畠山氏の招きによってやってきたわけですから、当然のことながら、この「七尾」には畠山の殿様がいたということになるわけです。そうしますと、史料（1）の永正11年に七尾という地名が出てきて、その3年後には京都からやってきた文化人が畠山氏の住んでいる七尾から、石動山に登ったとありますから、この頃には既に七尾城が築かれ、その七尾城に畠山氏が既に住むようになっていた可能性がある、というふうに思いたいわけです。

そこで次の史料（3）は、永正14年からちょうど10年ほど後の大永6年（1526）の史料です。このときは「能州七尾城畠山左衛門佐亭」

<p>庭ひろみ苔のみとりはかたよりてあつき日影に白きまさこち 夏香</p> <p>ふきすてし軒のあやめのしつくさへかほりて落る夕くれの雨 嶺郭公同当座、</p> <p>都までき、もつかなん鳴声の高ねをこゆる山ほと、きす 寄琴恋</p> <p>やよいか引手と、めんつまことのかへり声のみきぬくの 空</p> <p>同左衛門佐義総より、</p> <p>ちきりとてありそかくれも筆の海のことのはの花の波ややすら ん</p> <p>和侍る、</p> <p>ちきりのみありそかくれもよる波にこと葉の玉の光みすらん</p>	<p>史料（3）今川為和集</p> <p>能州七尾城、畠山左衛門佐亭にて、当座、 （大永六年） 五月廿一日、</p> <p>分まよふ秋の野もせに鳴虫も色の千種に声みたるらし</p> <p>同廿五日、同亭にて、千句発句に、</p> <p>五月雨はをの、えくたす山路かな</p> <p>同彼左衛門佐二男代に、 （畠山義総）</p> <p>夕よりいて、夜なかし夏の月</p> <p>同廿九日、同亭にて、夏色</p>
---	--

にて、当座の和歌会が開かれたということです。この年に「能州七尾城」という地名が初めて出てくる。七尾城の初見史料です。ですから、この七尾城において、城内に畠山（左衛門佐）義総の居館があって、京都から義総を頼ってやってきていた公家歌人の冷泉（今川）為和が、この「七尾城」の畠山義総の屋敷で和歌会を開いたとありますから、まぎれもなくこの段階では、少なくとも畠山の殿様は七尾城内に館を構えて住んでいたこととなります。

ただし、その場所はどこかということ特定するのは非常に難しい。先ほど七尾城にある多くの遺構について千田先生からご説明いただいて、いろんな平坦面、曲輪がいっぱいあるというお話を聞きましたけれども、その曲輪のどこにその時の畠山義総邸があったのかということになると、これは今後発掘調査か何かをしないと確定はできないでしょう。それが本丸跡にでもあったのかと思いたくなりますが、それも確認はできないということです。

ただし、その手掛かりは文献に全くないわけではありません。大永6年5月29日に畠山義総の屋敷で和歌会が開かれたときに、「庭ひろみ こけのみとりは かたよりて あつき日影に 白きまさこち」という和歌を冷泉為和は読んでいるわけです。七尾城内の畠山義総の屋敷で開かれた和歌会で、この義総の屋敷に広い庭があって、そこに苔がびっしり生えていて、その苔庭に光が差し込んでいて、差し込んだ光が庭の苔にあたって、その部分があちらこちら白く見られたという様子が詠まれています。

そうしますと、少なくとも七尾城内の畠山義総の屋敷には庭園があったということになります。ですから、この七尾城内の郭の跡の中から、今後の課題ではありますが、庭の跡が発見されると、ひょっとすると、その場所がこの和歌に出てくる義総の屋敷があった場所なのかという手掛かり

になるかもしれません。

しかしながら、現在のところ七尾城跡内ではっきりした庭園の跡というものは確認されていません。今までそういった眼で七尾城内をまめに歩いたというようなこともあまりないようです。七尾城内で庭園の跡を探すとということが、今後の大きな課題になるかと思えます。

現在北國総合研究所が畠山文化の調査を能登共栄信用金庫の後援でやっていますが、12月に一度その調査メンバーで、七尾市教育委員会の善端直さんにご案内していただいて、七尾城内の庭園跡を調べようかと考えています。で、苔の跡はわかりませんが、庭園には石なんかが配置されているケースがありますから、石がひょっとしたら地上に顔を出しているかもしれないと思い、そういったところから庭園の跡を見つけることができないうだろうか。しかしそれには城跡の草が枯れてしまう時期を待っていて、12月頃に計画しております。見つければ、それをとっかかりにして畠山義総の屋敷のあった場所を特定する手掛かりが得られないだろうかという期待をしているわけでありませう。

次の史料(4)は、天文13年(1544)に作成されたで、これは戦国時代後期に近い時期です。その頃、温井総貞という文人の畠山氏の重臣がおりまして、当時七尾城内で非常に権勢を誇っていました。それによると総貞の私邸は「七尾山大石谷溪之半巖」にありとみえます。七尾の山の中、つまり七尾城域の中の大石谷と呼ばれる谷があったのでしょいう、その場所がどこにあったのかは特定できませんが、七尾城域の大石谷というところの一角に温井総貞の屋敷があって、その片隅に小亭を建てて「独楽

史料(4) 猶如昨夢集

独楽亭記  
温井氏総貞公者、能州太守之良臣也、私第在七尾山大石溪之半巖者、星霜惟深矣、頃者、築小亭乎第一隅、顔以独楽、蓋晞顔司馬温公之独樂園也、

亭」と呼んでいたとされます。この人はとても風雅な文人であったのですが、独り風雅を楽しんだということを京都東福寺の禅僧であった彭叔守仙が「独楽亭記」と呼ばれる、温井氏の別邸を称えて読んだ漢詩文です。

そこで先ほどのレーザ測量によって得られた七尾城域の曲輪の中に、重臣の屋敷があったということもわかるわけです。そこがどの場所になるかということになりますと、「大石溪」がどこかがわかりませんのでなんとも言えませんが、七尾城内に重臣が屋敷を構えて

住んでいて、別邸まで作って日常的に楽しみながら暮らしていたという手掛かりが得られます。ですから、七尾城の中には重臣たちの屋敷も置かれていた。多く確認できるようになった郭、平坦面の中には重臣たちの屋敷の跡、千田先生は先程長屋敷のことをお話しされましたが、長氏だけではなく、それ以外の重臣たちも城内の一角に屋敷を構えていたことが考えられます。

やがて天文19年から天文20年になりますと、能登国で内乱が起こりまして、七尾城内へ畠山の殿様たち（義統・義綱）が籠城するようになります。天文19年（1550）、本願寺十代目の法主証如上人が、当時の七尾城主畠山義統に書き送った史料(5)の手紙によれば、畠山義統が七尾城の中に籠城していたということがわかります。

また史料(6)は、おそらくその翌年（天文20

厚様 長三寸計、腰文、裏付  
 恩簡令披覽候、仍其方既御籠城之由、千万無御心元候、先度  
 加州之儀示預候間、即人数等不可相立、堅申付候、委細先日  
 御報令申候、然而只今承候之趣、最前示下、相違候間御分別  
 可為祝着候、更非疎意候、恐々  
 十六日出之、  
 十一月十三日  
 (天文十九年九)  
 左衛門佐殿御返報  
 (畠山義統)

就当国(能登)□刃錯乱、□一族中令人城候、無比類働神妙二候、  
 仍而具足備一両到着、喜悦候、涯分相届、於致忠節者、相当  
 之儀可申付候、謹言、  
 (天文二十年九)  
 二月二日  
 是清四郎次郎殿  
 義統(畠山)

年)のものと推定される文書ですが、七尾城主畠山義統が是清四郎次郎という侍に対して、一族を連れて七尾城に入城して来いと呼びかけています。つまり、戦乱があったりした場合、能登国内にいる畠山方の家臣に対して七尾城内に呼び寄せて城内に集結させる。そして戦さに備えさせるということが行われていたようです。

こうしたことから、合戦の非常時には、城内に軍勢を滞在・逗留させるための空間(曲輪)や、施設(建物)があったということが考えられるわけです。

また史料(7)は弘治2年(1556)の史料ですが、この前年の弘治元年から永禄元年という年までの4年間、畠山氏の重臣温井一族が能登で反乱を起こしまして、七尾城は籠城することになります。この頃に畠山氏の奉行人たちが城の周りに柵をする木材として、「壺間に拾本宛」を準備して、七尾城へ来月の2月10日までにちゃんと持って運べといっています。諸橋六郷というのは現在の鳳珠郡穴水町の甲から諸橋地区から能登町の宇出津あたりにかけての地域ですが、この地域を知行し支配していた畠

山氏の家臣たちに対して、城の増強にかかる木材の調達を命じているのです。

この諸橋六郷と呼ばれる地域は、

御構柵之木壺間ニ拾本宛、并□□□ねそ八白□以下申合被相調、為諸橋六郷百間、来十日以前ニ急度可被納之旨、依仰配(鳳至郡)符如件、弘治貳

正月廿九日

時長(花押)  
景連(花押)  
統親(花押)  
統朝

三宅鶴千代殿  
同九郎右衛門尉殿  
伊丹殿  
神保孫九郎殿  
飯河大炊助殿  
山田左近助殿  
天野殿  
今井出羽守殿  
東野殿  
德田彌左衛門尉殿

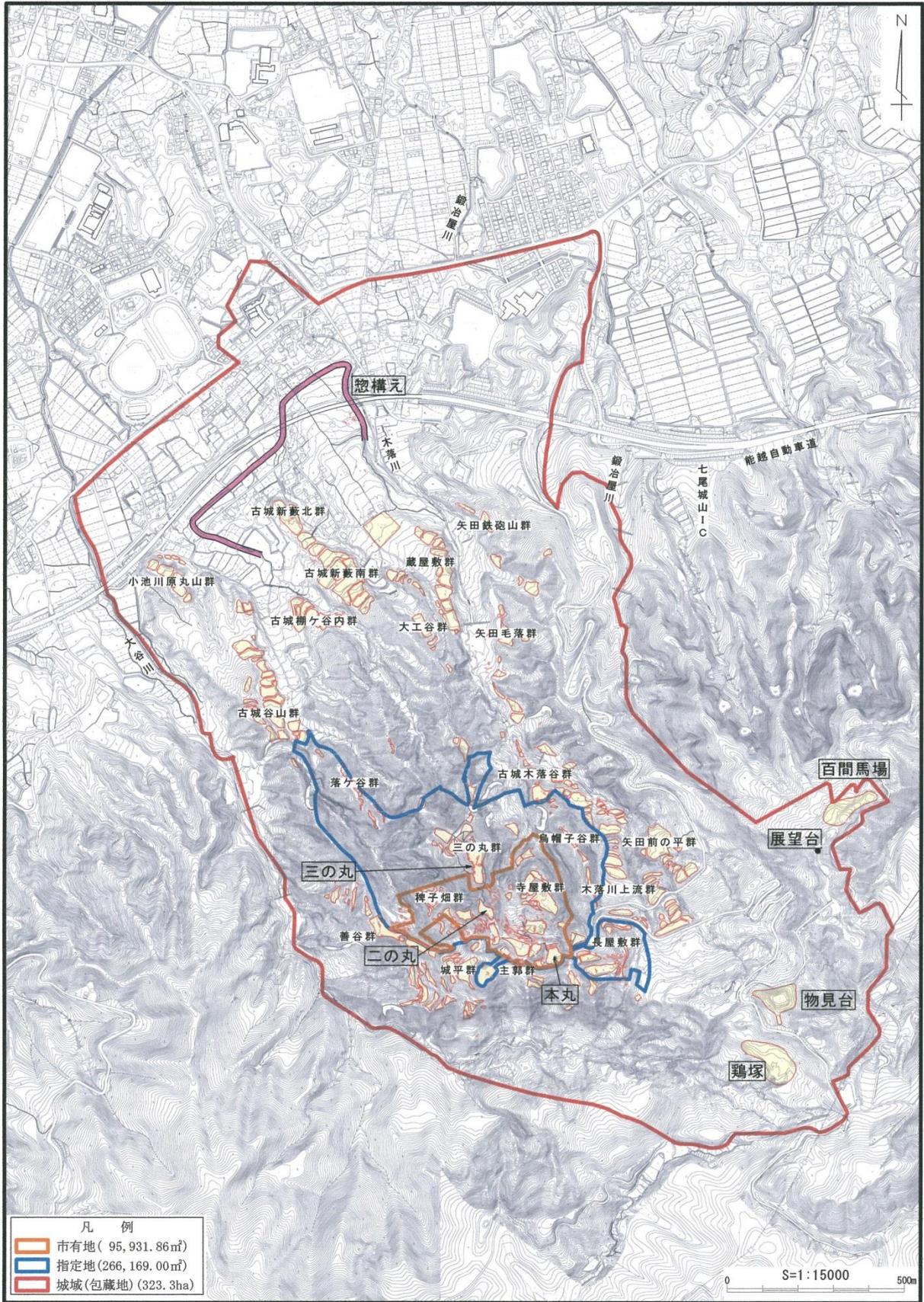
史料(7) 三宅家文書

富山湾に面した能登内浦沿岸部で、その領主たちに命じているわけですが、彼らはどのように木材を七尾城に運んだのか。当然、船で運んでいると思います。船で七尾まで運ぶ。ただし、このときは七尾城の正面（大手）の城下の方では温井氏がさかんに攻撃を仕掛けています。合戦の最中に七尾城の正面から、奥能登の諸橋六郷から運ばせた防備のための用材を運び込むことは難しい。

おそらく、これは富山湾経由で灘浦の方から七尾城の裏手を通して七尾城内に運び込んだのではないのでしょうか。ちなみに、三宅鶴千代以下、この史料に出てくる人々は、諸橋六郷の村々を所領（領地）として支配している畠山の家臣（給人）たちです。ですから、こういう城の構築のための用材を持ってこいというとき、村々に直接畠山氏が命じるというよりも、その地域を支配している、畠山家臣の領主を通して、彼らから自分の領域内の村々に割り振りをし、それを持ってこさせる、そういうかたちでの指示をしていたこともわかります。

さてみなさんのお手元にあるパンフレットの裏に「七尾城跡地区区分概略図」があります。この概略図の中で、今回の調査でかなり大規模な平坦面があることが明らかになりました。この地図の下の方に、鶏塚であるとか、物見台であるとか、こういったところに黄色く色が塗ってあります。その下の方が灘浦海岸です。ですから、奥能登から船で灘浦の方へ、城の増築のための柵の木を船で運んできて、七尾城の裏手から城内へ持ち込む。

この鳥塚とか物見台とか、このあたりの付近には道が通っていますし、鳥塚の下のあたりは谷合になっていまして、この谷からずっと上がっていくと本丸に近いことが、この地図からわかります。今回の調査で、この城の南の方の灘浦に近い方にも、かなりの規模を持った平坦面が確認できることは、七尾城の裏手として、富山湾から灘浦海岸経由で七尾城の裏手か



七尾城跡地区区分概略図

ら城内に入るルートをおさえる場所に、何らかの施設があったというようなことを推測する手掛かりになるのではないかと思うわけです。

そして史料（8）も内乱中の弘治3年（1557）の史料で、やはり七尾籠城中のものです。このとき畠山氏の重臣であった長統連は、山本弥右衛門尉に感状を与えています。長氏は畠山氏とともにこのとき籠城してしまして、長統連は自分の配下の山本に対し、籠城中よく頑張ったというお褒めの感状を与えている。

ですから、当時七尾城には畠山の殿様だけではなくて、畠山の殿様を支える重臣たちも籠城していた。そして、その重臣たちは、自分の家来たちも籠城させていたことがわかるわけです。その場所が、先ほど千田先生のお話にありました長屋敷の跡に、長氏がそのときに籠城していたのかどうかは、はっきりしません。少なくとも長統連はかなりの家来たちを連れて七尾城内に籠城していたということを考えると、長の屋敷のあった場所がかなり広い範囲で確認できるとしてもおかしくはないのです。

史料（9）によりますと、弘治3年（1557）、まだ七尾城の籠城が続いている時に、七尾城方は越後の長尾景虎、のちの上杉謙信に対して援助を求めております。それに対して上杉謙信から手紙が来ます。その手紙を読んで、さら

史料（8） 長家文書「御判物写」

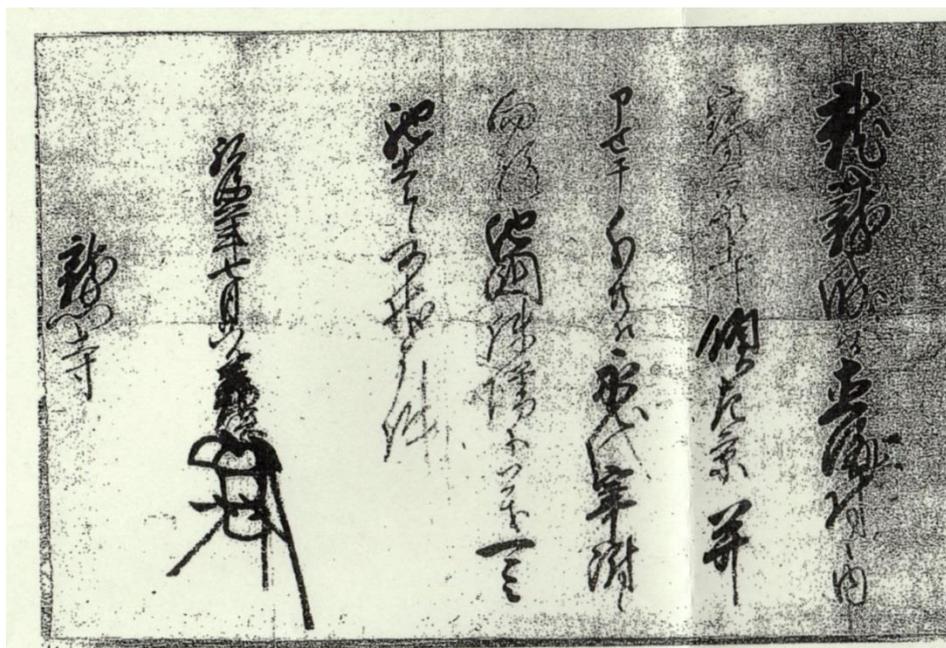
今度籠城自堪忍神妙二候、彌忠節可為肝要者也、  
 弘治三年  
 卯月五日  
 山本彌右衛門尉殿  
 統連（長）（花押Ⅱ影）

史料（9） 上杉家文書

長尾彈正少弼殿 惠祐  
 義綱  
 重而差下飛脚候、今度者返札共種々入魂之趣、難申謝候、誠累代無別儀效祝着候、当城彌堅固候、可被心安候、始末度々申越候条、不縷陳候、仍糧米儀可有扶助之由、先以士卒覚悟旨此事候、菟角其国任計策候、以助成可属本意外、別条無之候歟、渡海少茂及隱波者、急度加勢段憑入候、猶以別紙条々申越候、委細遊佐美作守可申候、恐々謹言、  
（義綱）  
（魚山）  
（魚山義統）  
 二月十八日  
 長尾彈正少弼殿（景虎）  
 惠祐（魚山義統）（印）

に畠山氏の当主であった義綱と、その先代の当主であった父の義統（徳祐）が連署で、長尾景虎に送った手紙によれば、越後の長尾氏から兵糧米を七尾に送ってくれることに喜んでいますが。日付は旧暦の2月ですから、今でいう3月で、やがて春が近づいてきているわけですが、まだ富山湾の海、日本海の海は荒いのか、しばらくして波が静かになったら軍勢を越後から送って加勢してもらいたいということを改めて依頼しています。越後の長尾氏から七尾城に、兵糧米や軍勢を送ってもらうことになれば、当然のことながら船で富山湾を経て七尾城に入るということになる。これも、先ほどの地図と同じように、灘浦海岸の方から上陸して七尾城の裏側から、越後からの兵糧米なり軍勢なりを運び込むというようなことが考えられます。このように、七尾城の籠城を支えたのは、富山湾の海だったと思われる。

また史料（10）の文書、これは七尾市小島町の龍門寺にある史料ですが、この中に「籠城」という文言が見えます。おそらく、このとき龍門寺は畠山方の使僧として、越後の長尾氏のところにも行っていたかはわかり



史料（10）龍門寺文書  
 就籠城候、直海村之内宝泉寺領左京并アセチ分共仁、永代寄附  
 候、向後他国使僧等義、可令馳走候、仍状如件、  
 弘治三年七月廿八日 義綱（畠山）（花押一）  
 龍門寺（龍島郡）

ませんが、使僧として活躍していたということで、羽咋郡の直海の内の一部を寄付してもらっています。この段階ではまだ籠城中だったようです。しかしながら、このように協力してくれたものに対して、(籠城中の) 畠山義綱は土地を寄進するというようなこともしています。

問題は、次の史料(11)です。弘治3年11月、畠山重臣の長統連が「籠城神妙候」とあって、3か年もの間籠城していた七尾城の籠城は、弘治元年、2年、3年と3か年にまたがっており、七尾城は長期間にわたって籠城可能な城であったのが知られます。ということは、城下の方から敵方に攻められても、七尾城に立てこもって抵抗する。しかしながら、食料だとか兵糧米とかそういうものは、裏手の灘浦の方の道から七尾城に運び込まれたとすれば、3年であれ5年であれ籠城することは可能だったということになってくるわけです。

史料(11) 長家文書「御判物写」  
今度三ヶ年之間、籠城辛勞神妙候、就其給恩為増分百疋申付候、彌可致忠節事、專一候者也、  
弘治三年  
十一月廿八日  
山本与次郎殿  
統連(長) (花押II影)

ですから、今回の調査で灘浦に近い方にかなりの規模を持った平坦面が確認できたということは、七尾城を支える生命線ともいえるべき富山湾、灘浦海岸経由で七尾城に入る道、この道筋に関連した施設があったのではなかろうかということになります。この能登の内乱は、翌永禄元年(1558)に守護の畠山氏が反転攻勢に出て、それまで七尾城を攻めていた温井勢を能登から追い払ったことで鎮圧され、この籠城は4年間で終わるわけですが、長期間にわたる籠城が可能であったこと、そしてそれを可能にした施設として、この灘浦に近い方に設けられた曲輪、その曲輪に置かれていた施設というものが機能していたのではなかろうかと思えます。

さらに史料(12)の史料によると、能登では永禄9年(1566)か

態差上飛脚候、仍以計策、当月朔日七尾之儀相破、同日玉尾  
 城乗取候、同三日八代安芸入道相踏候神明之地へ入城候、符  
 中池田要害へ者、遊佐孫右衛門尉・神保周防守、其外馬廻之  
 者共入置候、然者從七尾国中へ通路不相叶候、湯山之儀も無  
 別義候間、一國大略手二入分候、七尾之儀以調略可申付候、  
 七日城于今敵相踏候条、三宅彦次郎從加州口相働、去年拵候  
 坪山抱候、於始末者可心易候、猶富来小次郎可申候、恐々謹  
 言、

(永禄十一年)  
 五月六日

(由直瀬正盛)  
 道三入道殿

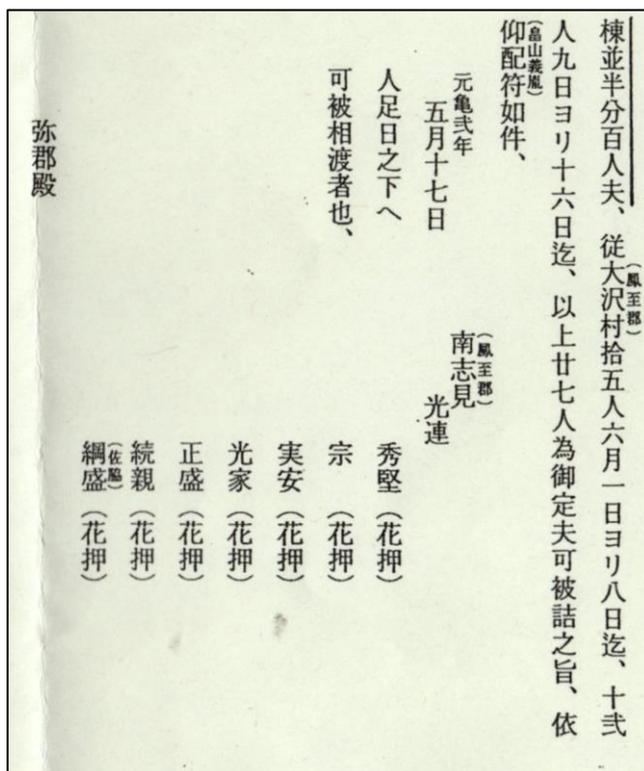
(畠山)  
 義綱 (花押II)

ら11年（1568）にかけて再び内乱が起っていました。七尾城主畠山義綱が重臣たちによって能登から追い払われ、いったん近江に逃れますが、ふたたび軍勢を集めて七尾城へ、今度は自分の城を取り戻すために攻めてきます。その際5月1日に、「玉尾城」の乗っ取ると見えます。この「玉尾城」というのは、どうやら七尾城の付近にあった城砦と考えられます。この砦は、従来よく分か

らなかつたのですが、江戸時代の史料をみましたところ、七尾市万行町にあたるかつての万行村に「玉尾」という地名が出てきました。そうしますと、七尾城の麓の万行あたりに玉尾という場所、この場所を私はまだ確認していませんけれども、そのあたりに七尾城の周辺を固めるための砦があった可能性があって、それを畠山義綱軍は奪ったということになります。さらに「府中池田要害」というものも出てきます。「神明」という地名も出てきます。ですから、七尾城の付近には、七尾城の周辺を守るための砦が点在していたことがわかります。

次いで史料（13）は、元龜2年（1571）の史料で、まだ畠山氏が上杉氏と戦争をしていませんが、畠山の奉行人が弥郡という、輪島の大沢村の領主であった畠山の家臣ですが、これに書き送ったものです。棟（家）並百人夫を免除するというようなかたちの言葉が出てきます。城の修復とかをするときの夫役といいますが、一種の人頭税のようなものだと思いますが、大沢村から15人を6月1日から8日まで、さらに12人を9日か

ら16日まで、合わせると2班に分かれて8日間で27人分を、夫役として弥郡氏に対して、七尾に詰めさせるよう命じたものと思います。そこにもありますように、その人足は輪島の南志見光連という人物、長氏の一族だと思いますが、大沢村の人夫を集めて光連に渡し、そこから七尾に



連れて来るよう弥郡氏に指示しています。ですから、これはおそらく七尾城の拡張工事をやるために人足を領内に徴発した、その時の史料の一部でしょう。七尾城の拡張あるいは修復工事を行うときには、領内の畠山氏の家臣たちを介して、その支配する村々の百姓たちを動員するということが行われていたのです。七尾城の拡張・修復作業というものは、戦乱の時以外でも行われていたということの一つの史料と見做してよろしいかと思えます。

最後に史料(14)です。この史料は先ほどのお話にもありましたが、天正5年(1577)九月、越後の上杉謙信によって七尾城が落城させられます。そのとき上杉謙信は七尾城を攻め落とした後に、上野国の同盟者であった北条(丹後守)景広の息子(安芸守)高広に対して、七尾落城の様子を非常にうれしそうに書き送っています。これによると、七尾城を守っていたはずの遊佐続光が上杉方に寝返り、上杉勢を城内に引き込んだことによって、上杉勢数千人が七尾城に攻め込んだとみえます。その時、長(刈馬)続連をはじめ一族百余人が七尾城内で討ち取られたとあります。

急度申遣候、内々至其表可越山処(鹿島郡)ニ、為如何モ七尾之凶徒、以数千人越・賀之間へ乗出、殊ニ信長招出候、此度モ信長雖令出勢候、兩越之諸勢、賀国へ依差使、不堪凶徒敗北、于今賀国ニ助勢之者共差置候キ、然処ニ、馬廻越中以手飼之者計、当地七尾押詰、無昼夜之嫌責控立候間、遊佐美作守城中引破及忠心、長対馬・同息九郎左衛門・同息新右衛門・同息新八郎・同息杉山、彼等初一類百余人討取、今十五、一日之内ニ付落居、本城ニ手飼之者差置、諸練輪普請等申付候、十五日之内ニ普請可出来候間、帰府可申候、其上子細共候間、其表之儀も、重而一切之模様以使可申候、至今日迄萬方存分之儘ニ候、専者当地七尾落居、東北可伐瑞相ニ候、日出節左右弥可申越候、謹言、

尚々、当地七尾要害、名地与申、人数数千に移籠候処、如此落居、都鄙之覚、老後之面目ニ候、城主畠山ニ候間、彼は無申事候、畠山次郎方をハ上条五郎以好引取、旗本ニ差置、長一類根本人ニ候間、作切腹候、温井・平以下、身命計扶置、能州心安収手裏候、賀・越ハ従去年申付候間、北国越前計ニ候、以上、

九月十五日(天正五年)

北条丹後守殿(兼広)  
同 安芸守殿(高広)

謙信(上杉) (花押)

長一族は上杉勢に七尾城が包囲された段階で、一族を挙げて七尾城内に結集して上杉勢と戦うために備えていたことが、このことから分かります。上杉謙信は長一族の主だった者たち百余人を皆討ち取ったわけです。ということは、単に百余人しかいなかったではなくて、その下っ端の家来たちや、その配下の軍隊たちもいたのですから、かなりの規模の軍事力が七尾城内の長氏のエリアに結集していた。しかしながら、七尾城内に遊佐続光の裏切りによって攻め込むことに成功した上杉勢は、長一族の主だったもの百余人を打ち取ったというのでしょうか。

先程千田先生が言われましたように、私は今回の調査で、特に長屋敷が大きな規模だったということが明らかになったことで、いっそう意を強くしたわけです。一族百余人をはじめそれ以外の配下の軍勢を含めて、かなりの軍勢が七尾城内に、長氏の配下として楯こもっていたとすれば、それだけの人を収容する場所がなくてはならない。江戸時代になって長屋敷という地名で、今の本丸のちょっと先のところが呼ばれているわけですが、

この長屋敷という場所は、単に江戸時代の人たちが適当に、そこに長の屋敷があったというふうにしたのかと、これまでは思っていたわけでありませぬ。しかしながら、最後の上杉謙信による七尾落城の時の史料を見ますと、どうも主だった連中だけで百余人、それ以外の軍勢も含めるとかなりの規模の軍事兵力が結集していたとすれば、その場所はどこかといえは、ひょっとしたら後世の人たちが長屋敷と呼んだ、あの場所であったのかもしれない。それだけの兵力、軍事力を結集させるだけの空間というものが七尾城内にあったといえましよう。

この時、上杉謙信が国許の一族長尾和泉守という者にあてた手紙によれば、「七尾城主二候長対馬一類一族」と見え、長統連は、当時七尾城主的な存在で、七尾城内で主導権を握っていた。当時七尾城内で畠山の殿様は子ども、幼君であったものだから、実際城主のような役割で実権を握っていた。そして多くの兵力を七尾城内に結集させて、上杉方に抵抗していた。それで長一族が上杉謙信にとって退治する対象だったということで、皆殺しにした。謙信の手紙では、それ以外の温井備中、三宅備後をはじめとする畠山の重臣たちはみな命は助けてやったと書いてある。実は、上杉謙信の七尾城攻略というものは、長一族を七尾城内から排除することが目的だったのです。この時に長氏は、上杉謙信と敵対していた安土の織田信長と手を結んでいて、長一族の孝恩寺宗頼、のちの長連龍が、この時織田信長のもとに七尾城救援のための援助を求めて安土城に赴き、信長の理解を得て柴田勝家をはじめとする織田軍が七尾城救援のために手取川をこえて松任まで来ていたのでした。しかしここで七尾落城の悲報を知って、織田軍は再び手取川をこえて越前に退去することになります。上杉謙信の七尾城攻略の目的は、七尾城での主導権を握り、織田信長と手を結ぶ長一族を排除することだったのでした。

越後の上杉と能登の畠山は、戦国時代100年間を通して同盟関係にありました。ですから、上杉と畠山とは敵対関係ではない。為景（上杉謙信の父）の時代以来、畠山とは同盟関係にあった。その同盟関係にあった畠山氏の七尾城の中で実権を握り、織田方と手を結ぶ長一族、これは謙信にとっては絶対許せない存在だったということです。それが、上杉謙信の七尾城攻略の一番の目的だったとされるわけです。その長氏の一族郎党が七尾城内に結集していた。かなりの規模の兵力と関係者が集まっていた。それがひょっとしたら、あの長屋敷のあった場所で、それだけの規模のものが七尾城内にあってもおかしくはないと思われれます。

そういうことで、たくさんの曲輪が今かなりの数残されているわけですが、その郭の一つ一つがどういう歴史を持った場所なのかは、今後の調査を通して明らかにされていかなければならないでしょう。長屋敷に関しても、七尾落城の際に、長氏が多くの一族と兵力を集結させていた場所があったということは、文献にみえるわけですから、確定はできないものの、それが長屋敷の可能性もある。そういう場所であると考えられるわけです。

そういうわけで、今回のレーザ測量の成果によって七尾城域の範囲が明らかになった。その場所を断片的な文献史料と照らし合わせながら見ていくと、七尾城の中の曲輪一つ一つにいろんな歴史が込められているのではないかということが思い起こされます。乏しい史料からの推測ではありますが、そういう可能性を一つ申し上げておきたいと思えます。

## 七尾城の実像と今後の取り組みについて

谷内尾晋司・東四柳史明・千田嘉博・国分秀二

谷内尾：それではフォーラムを開始させていただきます。今ほど千田先生と東四柳先生が、航空レーザ測量の成果などから七尾城の評価についてお話し



ただきました。まだまだ時間が足りず、もっともっと聞きたいなという感じでした。

ということで、最初に七尾城の魅力について、いろいろあるかと思えますけれども、ここはという強調したいような魅力について、パネラーのみなさんに聞きたいと思えます。まず、本日初登場になります、国分先生から順にお願いします。

国分：七尾城山を愛する会、今年度から会長となりました国分です。先ほどのご紹介にもありましたように、毎日ではありませんが、週二回くらいは（城山を）歩いています。

何が一番楽しいかということ、歩いて新しいことを発見することです。最初のとっかかりは山道だったんです。大谷川から山道を歩いていくと、九尺石につきました。それから山道がその都度どんどん見つかっていく、それを楽しんだ。次に、七つ尾というところの尾根か分からない。とにかく尾根を歩いてみよ

うと思い、尾根を歩いていく。すると、展望台や城山に必ず到達する。じゃあ谷はどうだろうか。谷の途中で滝があ



ったりして、最終的には滝を登るのはほとんど不可能です。だけど、いくつか谷を歩いていくと、近くの歩きやすい簡単な道がついていて、だんだんそういうところを歩けばいけるんだなということで、楽しんでいます。城山を自転車で登ったり、ランニングで上がったり、僕なんかみたいに物好きであちこち歩く人は少ないですけれども、旧道（赤坂道）を歩く方はたくさんいます。そういう人と色々な話ができることが楽しみでもありますし、たくさんの方が訪れてくれるのを待っている、そういう存在です。

愛する会の宣伝をしておきますと、年会費千円ですので、どこの住所の方でもよろしいですから、矢田郷公民館に事務所がありますので、会員になって一緒に楽しみたいと思っています。よろしくお願ひします。

千 田：やはり、七尾城の魅力は、戦国時代の城の城下から本丸、山の上まで、自分自身で見ることができて、



必ずしもすべてがまだ解明されていないので、現地で遺構を見ながら謎解きができる、この素晴らしさが七尾城の魅力ではないかと思います。

東四柳：先ほど私は城の方の話をしてきましたが、実は山の麓、城下に住んでいた人たちは、武士の屋敷や町人の住居もあったかもしれませんが、「猶如昨夢集」という臨済宗東福寺派の虎伯という人が能登にやってきた時に、釣山軒という寺を、畠山義総の知遇を得て作った。その場所が七尾山の腰にあるとみえています。ですから、都からやってきた文化人たちが、能登で畠山文化という戦国時代の諸大名の中でも、すごい文芸活動というものを行っているわけですが、その京都から来た文化人たちが住む庵も七尾城の麓にあったこともあって、文化的な施設が設けられていたことがわかる。

谷内尾：ありがとうございました。七尾城といえば、本丸跡がある山城の部分がか城だと思っている方が多いのではないかと思いますけれども、



今回先生方がお話いただいたように、城山の麓にある曲輪群とか屋敷群、これも非常に良好に残っているということです。他の城跡に見られない大きな魅力です。だから、市民の皆様にも、山麓の遺跡の重要性をしっかりと認識していただきたいと思います。

今回の測量で非常に大規模な城であるということが分かりま

したが、どうも、そこから疑問として、どうして能登畠山氏がこれだけの大規模な城を持つことが出来たのでしょうか。

千 田：能登畠山氏の研究は東四柳先生をはじめとする先生方の研究で大きく進展していますが、七尾城の全貌像が分かってくると、能登畠山氏がいかにすごかったかということが城からもわかってくるとおもいます。

東四柳：これは千田先生がおっしゃっていただきましたように、畠山がすごいということです。これは、地元にいる人はそう思っ



ていない。私もそうでした。かつて、畠山文化の研究で、『戦国武士と文芸の研究』という大著を刊行された、米原正義先生が、私に「能登の畠山は文化的にすごい。すごいのは中国の大大名大内ですが、大内に匹敵するくらい、大内よりすごいかもしれないよ」と米原先生が昔おっしゃっていました。そのとき、私は心の中で「この先生ちょっとオーバーなことを言う。大内と畠山じゃ戦国大名としての規模が違うな」と思っていました。

ところが実際、私は最近必要があって、畠山文芸の史料を紐解いていきますと、米原先生が言っていたことはオーバーなことじゃなかった。周防の大内に匹敵する、畠山はそれ以上だ。七尾城内で和歌会をやっていた畠山義総というのは、当時の戦

国大名の中で個人としては最も文芸活動をさかんにやった大名ではないかと、最近思うようになってきたのです。ですから、そういう面では、能登の畠山というのはすごい。文芸活動の面では日本でも戦国時代屈指の大名だったといえるでしょう。

文芸活動がさかんであり、都から多くの文化人たちを受け入れるというのは、それだけの経済力とその国の政治的安定がないと、それはできないわけです。そのように考えていきますと、実は戦国時代の畠山の領国支配、つまり戦国大名としての畠山というのは、我々が思っている以上にすごい大名だった。戦国大名の中で100年間、天正5年（1577）まで生き延びた戦国大名は少ない。その中で天正5年まで生き延びた畠山は、それだけのしっかりとした基盤を持っていた大名だったということになる。

ところが、その割に我々は、畠山氏の勢威についてぴんとこない。なぜかというと、戦国大名として地味だからです。なぜ地味かかというと、一つには下剋上によってのし上がった家ではない。（越前の）朝倉だとかは守護代からのし上がってきた家です。畠山は室町時代以来守護の家がそのまま、戦国大名にスムーズに移行していった家ですから、ドラマティックな交代劇がない。もう一つは隣国へ攻めていって領国拡大というものがない。積極的にやらなかった。越後の上杉だとか他の諸大名はみんな、戦国大名で有名な強い大名はみんな隣国へ攻めていって、戦いで名を挙げ、戦国大名のイメージを高めているのです。畠山は残念ながら、それをやらない。隣の越中は畠山の本家の分国で、戦国期には内乱が続いていますけれども、そこにも頼ま

れば仲介にはいくけれども、手は出さない。越後の上杉は越中へ進攻して新川郡を手に入れますが、畠山はそれをやらない。

なぜやらないのか。私は、教養を身につけた畠山家当主のプライド、文化的な面で非常に教養のあったことが関係していたと思います。教養を身につけた武士は、人の家の品物をとったり、人の領土を奪ったりはしない。やっぱり、わが身をしっかりと守って、自分の分はしっかりと固めて守るけれども、人の物をほしがったり手を出したりしない。そのため、周辺の国に攻めていったり、領土の拡大を図ろうとはせず、それが戦国大名としてのイメージを、いまひとつ力の弱い印象を与えることになった。

しかし、畠山は100年間、最後の20年くらいは内乱が続きますが、戦国時代の中頃、文化活動のさかんであった畠山義総の30年間は、能登は政治的にきわめて安定の時代を迎えています。ですから、そういう自分の国はしっかりと固め、そして地域の文化を高め、家臣も自分も文化的な教養を高めていく。そのことによって、人の領地を奪ったり、下剋上をやるような荒業はやらない。けれども、自分の領地・領域はしっかりと安定的に守る。そういう面では、非常に基盤のしっかりした大名であったといえます。



畠山義総像（複製）

ですから、その畠山が自分の城を100年間、整備し拡張し、しっかりした自分の拠点として築き上げていくことは、(戦国大名として) 少しも実力不足じゃない。だから、千田先生がおっしゃっていましたように、畠山は地元の我々がもっと評価しなければならないということを申し上げておきたいと思います。管領畠山家の分家だとかで少し負い目を感じるのではなくて、戦国大名の中では最もしっかりと自分の国を守った、日本でも随一の教養豊かな大名家だった。その能登畠山家の居城が七尾城である。七尾城といえば、畠山という非常にしっかりとした格式をもった、基盤をもった大名の居城であったということがわかるのではないかという気がいたします。

谷内尾：ありがとうございました。先ほども申し上げましたけれども、昭和9年(1934)以前に国の史跡となった城跡のほとんどが現在、国の特別史跡になっています。七尾城も特別史跡を目指して頑張りたいと思います。

それでは、七尾城の保存・活用を図るには、いろいろな課題があるかと思えます。まず何かから取り組んだらよろしいのでしょうか。



国分：先ほど言いましたように、城跡もありますが、自然も豊かです。それが全くなくて城跡だけ残すというのは少しさびしく感じま

す。だから、城跡としてきちんと残す。ただし、道がはっきりしないので、その道を一まわりできるような、遊歩道的な、自然を取り入れた、そのような場所にしてほしいと思っています。

それ以前に気になっているのは、クマがこっちにやっこないように、なんとか大谷川を越えないようにと考えております。それとイノシシが石垣の周辺、遊歩道を荒らしまわっています。

危険なこともあるし、立入禁止・駐車禁止になる場合もありますので、そこをなんとか解決していただきたいと思っています。



千 田：これからの七尾城でありますけれども、第一にお願いしたいのは、市民の方が、七尾城は市の宝、すごい遺跡なので、ぜひこれからの調査と整備に期待して下さって、応援して下さる事です。

つぎに七尾城がこれほどすごいことを全国の人に知っていただいで、七尾にお越しいただく作戦を考えるのが重要だと思います。そのためには発掘調査を歴史好き・戦国武将好きに見ていただくようにくふうするとか、「モノからコトへ」を意識した戦略が必要になるのではないのでしょうか。

東四柳：先程の谷内尾先生のお話ではないですが、国の特別史跡、これをぜひとも目指してほしい。金沢城は、多額の費用をかけて調査をして建物を復元していますが、いまだ国の特別史跡ではない。越

前の戦国大名朝倉氏遺跡は中世の城館跡としては、唯一国の特別史跡です。何とか七尾城跡も中世城郭として、全国最初の特別史跡になってほしい。そのためには地元の皆様のご協力が是非とも必要かと思えます。地域を挙げて今後七尾城跡の調査に積極的に取り組んでいければと思えます。

谷内尾：ありがとうございました。時間があればまだまだお話をしたいところですが、七尾城の範囲が非常に広く、これから整備・活用していくためには、行政機関だけではなかなか難しいところがあります。七尾城を愛する会などの市民の皆様のボランティア活動なども、これから七尾城を守る・活用していくためには不可欠になると思えます。そのためには、もっともっと七尾城に関する情報を発信し、理解を深めていくことが大切ではないかと思えます。

今日は現在取り組んでおります七尾城の保存活用計画について、ご報告を兼ね、このような会を開催させていただきました。今後とも市民の皆様のご意見等を踏まえながら、事業を進めて参りたいと思っております。よろしくお願いいたします。

それでは今日の会の方を終了させていただきます。ありがとうございました。



